

氏名	ミヤコエミ 京都絵美
学位の種類	博士（文化財）
学位記番号	博美第386号
学位授与年月日	平成24年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉東京国立博物館所蔵国宝『孔雀明王像』の原図像の復元に関する研究 〈作品〉(1)東京国立博物館蔵 国宝 『孔雀明王像』想定復元模写 (2)東京国立博物館蔵 国宝 『孔雀明王像』下描線および儀軌に基づいた想定復元模写
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 宮廻正明
（論文第1副査）	〃 客員教授（〃） 有賀祥隆
（作品第1副査）	〃 准教授（〃） 荒井経
（副査）	〃 教授（〃） 木島隆康
（〃）	富山大学 〃 伊東順二

（論文内容の要旨）

本研究は、東京国立博物館所蔵国宝「孔雀明王像」（以下、東博本）について、非破壊調査に基づいてその彩色前の下描き線を抽出し、作品の原図像を明らかにするものである。そして抽出した下描き線を基に想定復元模写を制作し、東博本の位置づけの再検討を試みる。

孔雀明王はインドにおいて毒蛇の天敵である孔雀が神格化された仏尊である。この孔雀明王像を本尊とする孔雀経法は祈雨や安産、また一切の厄難を除くとされ、奈良時代には既に日本に伝わっていたことが知られる。現存する画像も多く、中でも本論でとりあげる東博本は平安仏画の優品として名高い。

現在までの孔雀明王像に関する論考では、東博本は日本に現存する孔雀明王像のなかで代表的作例として扱われていることが多い。先学の研究で、弘法大師空海によって弘仁12年（821）に作られた「仏母明王（＝孔雀明王）」に基づくという説と、9世紀頃仁和寺に伝来した「弘法大師様」の孔雀明王像に基づくという説が示されている。これはどちらも東博本が空海の関与した孔雀明王画像の系統であることを論じた内容であり、東博本は空海に根拠が求められる「大師様」と位置づけられている。

筆者は修士課程において東博本の現状模写を制作し、そのなかで東博本が儀軌を忠実に反映していない色彩表現や賦彩後に描き変えられたと思われる形跡など、他の類作と比較して特徴的といえる点に着目した。東博本は赤外線写真によって下描きの段階では他の「大師様」の類例と像容がおおまかに一致することが確認でき、特に京都智積院に伝来する孔雀明王像（以下、智積院本と称する）とは酷似していることがわかった。これは制作過程、つまり下描き後の賦彩の段階で、何らかの事情によって図像に変更が加えられ、部分的に塗り直しや描き起こしがなされたことを意味している。

東博本に見る図像の変更は柘榴のみに留まらず、明王の面貌から孔雀の表現、冠繪や蓮華などほぼ画像全体に及ぶ。儀軌に記されていない部分の変更であるために、これまでは「院政期の趣向に合わせた」との解釈もなされてきた。ただこれほどの変更は画像の継承が重要な意味を持つ密教絵画において、特に規範を強く守って受け継がれた日本の孔雀明王像においては異例といえる。密教ではその効験を画像の由緒に求めるため、単に美意識のみの理由で各部の表現を決定したとは考えにくい。そこで何らかの具体的な作例に基づいたのではないだろうかと推測した。

本研究では、現在まで詳細に復元されたことのない東博本の下描き線を調査結果に基づいて描き起こし、空海請来の『仏説大孔雀明王画像壇場儀軌』の記述に従って賦彩する。ここで復元された下描き線は東博本の描き変えられる前の姿というだけでなく、東博本を描くために参照された、空海相伝の日本の孔雀明王の根本像を想起させるものでもある。したがってこの下描き線による一幅は現存する孔雀明王像の中で最古の姿を伝えるものでもあり、美術史的にも意義深いものと思われる。

また、本研究の復元模写制作では、この下描き線から復元した一幅に加え、平成21年に行われた東博本についての光学的調査の結果を参照し、東博本の想定復元模写一幅を制作する。この二幅を並べ、見比べることによって、東博本の制作過程における図像の変更箇所を視覚的に明示することができる。制作年代の異なる作品を比較するのではなく同一の作品から派生的に復元を試みる方法は実技を基盤とした研究独自のものであり、より分かりやすい視覚的な検証が行えるものと考えている。

先行研究では、智積院本と滋賀・総持寺所蔵孔雀明王像が、東博本と法量をほぼ同じくし、東博本の下描き線と図様が酷似していることから、これらを同一の根本像に基づいたものと推定している。この論説に対し、筆者は下描き線の想定復元を通じて東博本の変更箇所の表現が殆ど醍醐寺所蔵白描孔雀明王図像および文化庁保管孔雀明王像の表現と一致している事を見出した。このことから同一の根本像という点に異論はないものの、東博本をそのまま「大師様」として位置づけていることに関してはなお研究の余地があると判断した。

本研究では、変更箇所の表現の典拠が醍醐寺系で相伝された孔雀明王像であることを指摘し、東博本が「大師様」ではなく「折衷様」であったことを明らかにする。そして東博本の制作にあたっては、正統である図像に変更を加えるという重大性を鑑み、天皇や院といった極めて位の高い人物が発願したと推定する。またそれに加え、醍醐寺系の図像を折衷していることは当時の真言密教界の横軸のつながりを表すものであり、とりわけ、小野流（醍醐・勸修寺系）の法流を受けた高僧が制作に関与したものと想定する。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、平安時代後期（12世紀）に制作された東京国立博物館所蔵の国宝「孔雀明王像」（以下東博本）について、彩色前の下描き線を赤外線写真によって抽出し、原図像を描き起こし、弘法大師空海請来の儀軌に基づき、想定復元模写を制作し、この想定本と東博本を比較することによって、東博本の図像系統を明らかにし、加えて東博本の制作過程における図像の変更箇所を明示すべく想定復元模写について論述したものである。

本論文は、序章・研究概要、第1章・美術史的研究、第2章・下描き線に基づいた想定復元模写、第3章・原本の想定復元模写制作、終章・総括の構成でなる。特に東博本の下描き線による原図像がいわゆる「(弘法) 大師様」と呼ばれる京都・智積院本孔雀明王像に酷似し、東博本では賦彩の段階で図像の変更が行われていることに着目し、その変更箇所がほとんど醍醐寺系で相伝された孔雀明王像の表現と一致していることを指摘し、東博本を先行研究のごとくそのまま「大師様」としてではなく「折衷様」であることを明らかにしたことは高く評価でき、その変更が何故、何時、誰によってなされたか、美術史的な課題を提示したことも重要視され、また東博本の想定復元模写で特に背景を目視はもとより蛍光X線分析で群青であることを確認し、塗り込められたことも新知見として注目される。

(作品審査結果の要旨)

本作品は、東京国立博物館所蔵国宝「孔雀明王像」の成立に関する新見解を具現化した想定復元模写等3点により成る。特に同寸同質で制作された2点の想定復元模写は、原本の熟覧調査並びに各種の光

学調査からの知見に基づいており、本研究の主題である図様の比較提示にとどまらず、色鮮やかな彩色技法や精緻な截金技法を再現した力作である。高度な描画技術による2点の想定復元模写を申請者自らが制作したことは、本研究を秀逸な論文からさらに類稀な完成度にまで高めたと言える。

(総合審査結果の要旨)

今回の研究は、東京国立博物館所蔵「孔雀明王像」を非破壊検査により下描き線を抽出しその作品の原図像を復元模写という形で再現し、図像が変更された根拠に言及する。創作と研究、科学を融合させることにより東博本の位置づけを試みるという、これまでになかった新しい分野の研究となった。

修士課程において、東博本の現状模写を行う中で、儀軌を忠実に反映していない色彩表現や賦彩後に描き直された箇所等がある点を指摘した。

そこで博士課程において、それらは何らかの事情により図像に変更が加えられ、塗り直しや描き起こしがなされたのではないかという点に着目し研究を進めていった。

下描き線から復元した模写一幅と、東博本の光学的調査を参考にした想定復元模写とを比較検討することにより制作過程における図像の変更箇所を視覚的に明示した。

そこでこの東博本が「大師様」ではなく「折衷様」であることに言及するに至ったことは二幅の模写を完成させたことによるのみ得られた成果であり高く評価できる。

また今後、制作者の特定にも及ぶ可能性を含んでおり、大いに期待できる研究である。